英文法の「世界」－ある英文法の講義の試みから

中村　順良

はじめに，「世界」という標題が何を意図しているかに触れるべきであろう．「～の世界」というフレージングは，いく重にも多義でありうるからである．「～の世界」という書名，例えば，「フラワーアレンジメントの世界」から，その本の性格や内容を正確に予測することはむずかしい．地理的な意味での世界を中心的な話題としているものでないとまでは推測できるとしても，フラワーアレンジメントという芸術領域にうとい読者を対象にするガイド風の軽い読み物ではないかと推測して当たることもあるかもしれないが，予想以上に濃厚な内容であるかもしれない．本稿は，その副題が示すように，大学生（教育学部英語科２年次）を対象に行われた「英文法の講義」をもとにしているという性格からいつて，軽い読み物を意図したものでないことは自明であろう．とはいうものの，相応の入門的色調を帯びることは避けられない．

触れておくべきかもしれないと思われることはほかにもあるが，少なくとも，次の点には触れておくべきであろう．それは，1960年代から盛んになつたと言われるフェミニズム運動ないしは女性開放運動が言語に注目しているという点に関連する．そこでは，社会は性（最近では，ジェンダーと言っているようだが，）差別的であること，および，言語は社会を反映していること，この２点を前提として，言語研究が注目されているのであると考えられる．注目されているのは，主として語彙構造（連語を含む）と語の使われ方であると思われるが，使われ方を考察する際に，音韻論的考慮が含まれることもある．ことばには，ヒトがことばをとおして，自らの住むコミュニテイー「世界」を規定する側面があることは古くから知られている．英文法の「世界」がことばのこのような性格からまつたく中立ではありえないのは確かであろう．しかし，本稿には，フェミニズム研究，ジェンダー研究に資する，または，反論する意図はまったくないことをお断りしておかなければならない．

あまたある英文法の書，英語の文法を説きまたは論ずる書のなかから，授業のなかで触れた次の２冊，江川泰一郎著『英文法解説改訂第３版』(1991)とHalliday, M. A. K. 著 *An Introduction to Functional Grammar* (1985) とを例にとつて，「英文法」の「世界」の可能な解釈の一面を見るとしよう．それには，両書の目次を拾って比べてみるのが手っとり早い．『英文法解説改訂第３版』は，目次に従って，第１章名詞から始まり，以下，代名詞，形容詞，冠詞，副詞，否定，比較，

動詞，動詞の時制，仮定法，受動態，助動詞，準動詞，接続詞，前置詞，疑問文と命令文，話法，特殊構文の研究まで18章から成る．他方，*An Introduction to Functional Grammar*の構成を見ると，まず，Part I The Clause と Part II Above, below and beyond the clause と2部に大くくりされて，各部5章ずつから成っているが，『英文法解説第3版』との比較のためだけなら，Part II の章構成を見ておくだけで十分であろう．それは，6 Below the clause : groups and phrases ; 7 Above the clause : the clause complex (7 Additional : Group and phrase complexes) ; 8 Beside the clause : intonation and rhythm ; 9 Around the clause : cohesion and discourse ; 10 Beyond the clause : metaphorrical modes of expression. である．この大ざつぱな比較からだけでもこれらの書が，性格的に，大きく異なつていることを見ることは容易であろう．この違いを，教科書的か学術的か，実用的か記述的か，語中心的か節中心的か，伝統文法的か否か，機能文法的か否か，等々の観点からとらえようとすれば，それなりの結果を得ることが可能であろう．本稿の観点に引き寄せて概括するならば，両書の違いは，要するに，それぞれの文法を見る見方の違いに由来するものである．換言すれば，「英文法」に異なる「世界」を見ているのであることになる．英文法の「世界」という標題をもつ本稿も，ささやかながら，それなりに独自の英文法世界を見てみたいと思っている．

本稿が問題にしようとしている「世界」は，それらのどの意味での「世界」とも異なる．あえて名付けるとするならば，想念の世界とでもういうべきものである．英語ということばの文法の内におのずから予定されている，ある種の囲い込まれたスペースを「世界」という概念でとらえようとする試みである．

次に，副題「ある英文法の講義の試み」に簡単に触れておくとしよう．辞書を使いこなしたり，英文の朗唱や朗読を聞いたり，英文を音読したり，英文を暗唱したりすることや，英文法の知識を獲得したりすることは，初級，中級レベルの英語学習者が取り組むべき重要かつ中心的な課題であるにもかかわらず，これらの経験や知識が欠けたり，不足しがちな学生が，本学に少なからずいるという実態をふまえ，本学部英語科には，相当ていどに包括的で，かつ，あるていど高次の課題であって，それにもかかわらず，学生に挑戦をためらわせるほどの難題ではなく，そのうえ，事後に適度の成功感，達成感を味わうことができるような，そういう教授課題を探すという教員側の課題が十数年前から存在した．中村・橋本 (1993) と，橋本・中村 (1993) は，そうした課題探求の過程に位置づけられる．1999年度後期英文法の講義を担当するに当たり，私が考えたのはそのことであった．そして，すでに終了した授業を振り返り，それをもとに，上記のような

課題意識から行った授業をもとに本稿は書かれるものである．はたして，課題に応えるにふさわしい内容になっているか，読者諸賢の忌憚のないご意見をいただければ幸いである．

講義をはじめるに当たり，私は，授業計面の概要を，授業が進むにつれて自由に変更することもありうる暫定的なものであることを断った上で，受講生に提示した．焦点が，統語・意味論に置かれていることは明らかである．授業が終了した現時点で，変更を加えた上で，簡潔化して示すとすれば次のようなものになるであろう．

1　はじめに－「世界」概念の多義性について
2　英語代用表現［A］－言語内世界と言語外世界との対応
3　英語代用表現［B］－言語内世界内の小世界区分
4　不定法と直説法
5　仮定法と直説法
6　いろいろな従属節，および，間接話法と直説話法
7　言語外世界の経験の文法化
8　まとめ－英文法をとおして見る世界の多層性と多様性

講義で扱うことのできたのは，実際には，1－5であった(5は消化不良の感は否めないけれども)ので，本稿は，1－5を主な対象としながら，この順序に進むことにする．(なお,本稿で使用する例文の多くは英文法関係の書物や論文等からの借用であるが，当該分野の共有の知的財産になっていると思われるものには出典を記さないことがある.)

1　はじめに－「世界」概念の多義性について

この授業で私が問題にしようとしている「世界」という概念がどういう概念であるかを述べる前に，それがどういう概念でないかを受講生に理解してもらう必要があると考える．この観点から，物語の世界と現実世界との対比，外国語をとおして見る世界と母国語をとおして見る世界との対比，旧約聖書の世界と新約聖書の世界との対比，国家意識の変遷，性とジェンダーとの対比等の例示から，「世界」概念の多様性に触れたのち，この授業が問題としようとしている「世界」概念を，ことば，ないしは，文法との関連からとらえようとしていることを，概略的に把握することをめざす．本稿の冒頭に述べられていることがおおよそそれに

重なるといえよう．ただし，『英文法解説改訂第３版』と *An Introduction to Functional Grammar* との比較の詳細は，予定にはあつたが，教室では時間の都合で割愛した．

2　英語代用表現［A］－言語内世界と言語外世界との対応

2．1　英語の代用表現を，大略，照応的代用表現（reference）と，代示的代用表現（substitution）とに大別する立場から，ここでは，主として，一人称人称代名詞，二人称人称代名詞，this，these，that，those 等の指示代名詞をとりあげて，テクスト外照応（＝外界照応）の文法的特性を把握することをめざす．その学習をとおして，言語表現に対応する言語外世界を想定する必要があることを理解する．

If *I* were *you*, *I* would not do it.
(Cp.　Kate said, "*I* would not do it.")

上の文に用いられている I がテクスト外世界にいるこの文の発話者を指示していること，また，you がやはりテクスト外世界にいてこの文を聞いている聴者を指示していることは論を待たない．このように考えるならば，一人称および二人称人称代名詞が，テクスト外照応機能の特性を本来的にもっていることは自明であろう．この記述に問題があるとすれば，それは，上に添えた参考例では，I が Kate を，いわゆる，先行詞としているので，今見たばかりの I の本来の特性と矛盾するのではないかということであるが，これは次のように考えればすぐに説明がつく．すなわち，参考例の　Kate が被伝達文の発話者であるという点に気づくなら，この先行詞 Kate と I との関係は，上で見た一人称人称代名詞の本来の特性が,テクスト内に持ち越されたものであることが理解されるであろう.結局，一人称人称代名詞と二人称人称代名詞が，本来，テクスト外照応のものであるという上の記述を変える必要はない．同じように，指示代名詞，指示形容詞，指示副詞の類が，本来，テクスト外照応のものであることは，これらの文法機能が本来的に直示的なものであるとするならば，すぐに説明のつくことである．教室で示した例文および解説は省略する．

このような特性を本来的にもつ語の類が英語　－　を含むヒトの言語　－　にあること，そして，そのことを説明するためには，テクストに対応するテクスト外世界の存在をあらかじめ想定しておかなければならないことを理解するのがこのセクションの目的である．

2．2 人称代名詞のうち，一人称人称代名詞と二人称人称代名詞の本来的特質を2.1で扱ったので，ここでは，はじめに，三人称人称代名詞を扱い，返す刀で，一人称人称代名詞と二人称人称代名詞の本来的使用以外の用法を補足する．

一人称人称代名詞と二人称人称代名詞および指示代名詞の指示は，言語外世界の対象を直接指示するのが本来であるのに対して，三人称人称代名詞の指示は，先行詞を経由して言語外世界に対象物を特定する．この観察が正しいものであるなら，三人称人称代名詞は本来的テクスト内指示の照応辞であるとすることができるであろう．

> Seeing a 'Kamidana' or 'Butsudan' in almost every Japanese home, you cannot but be confronted with the Japanese reverence for *their* beloved ones already having passed away, but still regarded as being present among *them*.
>
> - Asahi Shimbun Japan Almanac 1993.

このような場合、通例，代名詞 their, them は先行詞 Japanese を指示すると言い，先行詞とされた言語要素 Japanese は言語外世界の該当対象物を指示すると言う．しかし、これは，術語の用い方としては曖昧ではないだろうか．「指示する」が二度使われているが，一方の「Japanese が<該当対象物>を指示する」の「指示する」は「意味する」と言い換えられるであろうが，もう一方の「their, them が Japanese を指示する」の「指示する」は「意味する」とは言い換えられないことに留意しなければならない．ちなみに，一人称人称代名詞と二人称人称代名詞および指示代名詞の本来的指示機能の場合は「意味する」と言い換えても差し支えない場合である．この点を明確にしておく必要があるであろう．同様の注意は，日本語の「さ(指)す」にも，英語の 'refer to' にも必要である．

このことは，照応辞を，先行詞を経由して言語外世界を指示する「言語内的」(endophoric)照応辞と,先行詞を経由することなく直接言語外世界を指示する「言語外的」(exophoric)照応辞とに分けて考える根拠を理解するためにも重要である．

ともあれ，われわれは，言語外世界照応を本来の機能とする一人称人称代名詞と二人称人称代名詞および指示代名詞に加えて，言語内世界照応を本来の機能とする三人称代人称名詞を得たことになる．しかし，このことにより，一人称人称代名詞と二人称人称代名詞および指示代名詞が言語内世界照応機能をいかなる意味でも持たないことを主張しようとするものでないことは，上の2.1で取り上げた Kate said, "I would not do it." についての考察から明らかである．同様

に，三人称代名詞に，副次的にではあるが言語外照応機能のあることは，次の例が示している．(himの先行詞をテクスト内に見いだすことができないので，言語外世界に指示物を求める必要があり，言語外世界指示物に至りつくことに成功したときにのみこの文は解釈可能となる.)

"Did you see *him* today?" "No, I didn't."

以上を要するに，言語内世界とそれに対応する言語外世界とを想定することが必要であり，この世界区分に基づくことなしには，人称代名詞や指示代名詞などの本来の照応機能と副次的照応機能を正確に記述し分けることはできないということを見てきたことになる．

2．3 代示的代用表現

Halliday and Hasan(1976)で substituionと呼ばれている類の代用表現を「代示的」と呼ぶことにする．(安井・中村(1984)参照．)代示的代用表現の定義をひとことで言えば，それと同じ文法範疇に属する構成素を先行詞としてとる代用形であるということができる．この定義からは，代示的代用形は言語内世界で機能するのを本来とすること，および，代示的代用形の分類は文法範疇に依存することの二つの特徴が見えてくると思われる．

[名詞の代示] "Do you have a pen?" "Yes, I have *one*."
[動詞の代示] I don't go there every day, but I should *do*.
[節の代示] "Is it true that the war has ended?" "Everyone says *so*."

そうすると，われわれは，言語内世界で機能する代用表現に，三人称人称代名詞と，代示的代用表現とをもつことになるので，両者の違いは何かという問題に行き当たる．(この問題を考えるためには，名詞と名詞句，動詞と動詞句，補文標識と節などの，語彙範疇や文法範疇，ひいては，文構造についての知識が前提となるので,教室ではこの部分を補足したが,本稿からはその部分は割愛してある.)結論を急ぐとするならば，照応辞はテクスト外照応であろうとテクスト内照応であろうと意味に依存するのに対して，代示は文法範疇に依存するという点に両者の違いがある．当然，照応は文法範疇によらない。

(したがって，一般に流布している「代名詞は名詞の代用である」という一見もっともらしい定義の吟味の必要性に教室では触れざるをえなかったが，本稿では

省略する.)

3 英語代用表現 [B] - 言語内世界内の小世界区分

3.1 はじめに，再帰代名詞の特質に触れながら，言語内世界の中に小世界が仕切られるさまを見てゆくことにしよう．次例は，再帰代名詞が実際どのように用いられかを示す典型的とされている例である．

He shaved *himself* every morning.

さらに,主語には用いられないとして次の非文を示している文法教科書もある．

**Himself* annoys John.

これらは，確かに，再帰代名詞が先行詞を必要とするテクスト内照応辞であること，先行詞は代名詞より左になければならないことを示している．しかし，これらの例文と解説から，次の文の解釈や文法性の判断(使えるかどうかの判断)を学習者が間違いなく引き出せるかどうかは疑問であろう．

The shepherd boy hopes the old man will help *himself*.
I believe Bob to love *myself*.

ここで必要な情報は,再帰代名詞とその先行詞は同じ節内になければならない，いわゆる，clause-mates でなければならないという情報である．

ここまでくれば，言語内世界に節という小世界を想定しなければならない理由は明白である.しかし,節という小世界を想定するべき根拠はほかにもあるので，それらについては４以降で順次触れることにしている．

3.2 以上見たとおり，再帰代名詞の指示は言語内的であるのが本来であるが，他方，再帰代名詞は外界照応的に用いられることもあることを急いで付け加えなければならない．myself, yourself は発話者，聞き手を直接指示して，外界照応的に用いられることがある．

The paper was written by Ann and *myself*.
Protect *yourself* is difficult here.

いわゆる「絵画名詞」(picture noun) が主要部となって構成される名詞句内に置かれている場合に，再起代名詞は外界照応的に，または，後方照応的に用いられることもある．

There is a picture of *myself* which was taken years ago.
That the picture of *himself* in the paper is ugly enrages John.

ここで，絵画名詞の作る名詞句を，テクストの中にありながら，それとは比較的に独立した世界を構成することのできる言語要素ととらえることはできないかと考える．そこは，いわば，ある種の言語外世界ともいえる額縁の世界であり，上述2で想定している言語外世界に準じた取り扱いを受けるものととらえることはできないかと考えるわけである．この考えが正しいかどうかの検討は必要であるが，もし，この考えが上の例に対して有効であるとしても，次のような上のいくつかの説明原理が有効に働くとは思えない環境で外界照応機能や後方照応機能をもつ例もあることにも留意しなければならない．

Tom claims that the paper was written by Ann and *himself*.
John told Mary that as for *himself*, he wouldn't be invited.

なお，再帰代名詞にはいわゆる強意用法がある．この用法の場合，再帰代名詞は主語や目的語などの要素と同格的に用いられ，かつ，位置の移動が比較的自由である．要するに，上で論じた再帰代名詞とは異なり，これらは文法項ではないということに注意しなければならない．

I've never been there *myself*.
I *myself* have never been there.
I have never *myself* been there.

4 不定法と直説法

次の文の不定名詞句 a fish は，特定的解釈を受けることもできるし，非特定的解釈を受けることもでき，その意味で，曖昧であるとされている (Jackendoff (1972))．

John wants to catch a fish.

つまり，言語外世界に実際に一尾の魚がいて，たぶん水槽のなかで泳いでいるのを見て，それを捕まえたいと思っているという解釈(特定的解釈)が成り立つ場面に対応する言語表現である場合と，言語外世界に現実に魚を目の前にしているのではない場面で，なにか魚を一尾釣ってみたいものだと思っているという解釈(非特定的解釈)が成り立つ場面に対応する言語表現である場合とがありうるだろうというのである．Jackendoff によれば，後者の解釈が優勢であり，この解釈を want に依存する解釈と呼んでいる．後者の解釈は，前者とは異なり，実際に釣りあげた場合に限って現実世界に存在することになる魚を指示する．want に依存する解釈といわれるゆえんである．(ちなみに,特定的解釈の場合はこの種の依存関係はない.)

観点を変えれば，上の例は，to 不定詞節が直説法のつくる世界とは異なる独立の虚構の世界をつくる可能性を示しているということができる．

次のような,等位接続詞で結ばれた二つの不定詞節から成る文を考えてみよう．

John wants to touch a fish and I want to kiss *it*.

三人称人称代名詞 it が前方にある a fish を先行詞とすることがあるとすればどんな場合かを考えてみる．まず，a fish も it も言語外世界の物(魚)を意味している場合は，言うまでもなく， it が a fish を先行詞とすることに何の問題もない．a fish が言語外世界の物(魚)を指し(特定的解釈)， it が言語内世界の物(魚)を意味している場合(非特定的解釈)，および，その逆の場合は，それぞれの属する世界が異なる以上， it が a fish を先行詞とすることはありえない．どちらも非特定的と解釈される場合には，John と I が同一の想念の世界を共有しない限り，a fish が it の先行詞となることはない．では，John と I が同一の想念の世界を共有することはあるかと問うてみるなら，それはあるということになるであろう．なぜなら，上の文には，同一の虚構世界内で it が a fish を先行詞とする非特定的解釈がありうると思われるからである．

(教室では，to 不定詞世界のもつ，仮定性，仮想性，可能性に，動名詞のもつ具象性，現実性と対比しながら，触れている．また，to 不定詞を節と見なす統語論的根拠に触れながら，英語不定詞構文の一般的な統語特性にも若干触れるところがあった．関連して，「島の制約」や「認可」(license) という概念にも触れている．)

5 仮定法と直説法

仮定法は仮想世界を演出する重要な表現手段の一つといえる.「仮定法とは,現実とは反対のことを仮定したり,反対のことを願望したりするために使われる表現手段である.」という趣旨のことは,いわゆる学校文法でも,高校の教室でも,くり返し教えられていると思われる.にもかかわらず,仮定法は学生の苦手とするところであり,英文解釈もままならないのが実状である.

理由の一つに,仮定法を合図する形態的マーカーが英語ではほとんど失われているということがあるかもしれない.(他のヨーロッパ言語をほとんど知らない日本人学生にどれほどあてはまるか疑問ではあるが.)皮肉なことに,形態的マーカーが全く失われているのではないということがわざわいして,かえって,学生に仮定法を苦手とさせているということはないだろうか.if や would は確かに仮想世界の存在を予測させる手がかりになりうるが,一方,これらは仮想世界が存在しないところに仮想世界があるかのように誤認させる合図にもなりうるからである.さらにもう一つ,仮想世界という概念の分かりにくさというものがあるのではないだろうか.仮想世界といっても,それは単一の,単色の世界であるとは限らないからである.そこで,教室では,田中(1999)を教材として if 節のつくる世界の多様性を概観することから始めることにした.

詳細は省略するが,if のつくる仮想世界は,最も現実から遠い仮想世界から現実に近い仮想世界まで,少なくとも3段階に分けてみることができる.

1.実現する可能性のないことがらから成る仮想世界
　　If I were a bird, I would fly.
2.実現する可能性のあることがらから成る仮想世界
　　If it is fine tomorrow, we will go fishing.
3.すでに実現していることがらを仮想世界に事実化する
　　If oil is mixed with water, it floats.
　　If I was a bad carpenter, I was a worse taylor.

そして,現実を断言する if 節がある.この世界は,仮想世界から最も遠い,現実世界にある.

If I punish him , it is because I truly love him.(私が彼を罰するのは彼を真に愛するからだ.) – ニューワールド英和辞典.

予定では，不定詞節と if 節を切り口として英語の法 (mood) に進むつもりであったが，授業はここで時間切れとなった．講義で触れることができなかった話題には，ほかの機会がもしあれば，立ち戻ることとしたい．

終わりに，ともすれば迷走しがちであった講義に辛抱強く付き合ってくれた学生に感謝する．学生の出席を無言の励ましとして，とにもかくにも，最後まで講義を務めることができたのだから．

参考文献

江川泰一郎.1991.『英文法解説改訂第3版』東京: 金子書房.

Halliday. M.A.K.1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.

橋本二郎・中村順良.1993.「場面重視の英作文」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』3：239-243.

Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: M.I.T.Press.

中村順良・橋本二郎.1993.「英語の文構造に見る重層性」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』3：165-174.

田中美和子.1999.「説明すべき事実を提示する if」英語文法語法学会ハンドアウト.

安井稔・中村順良.1984.『代用表現』東京： 研究社.

(岩手大学教育学部英語教育講座)